

あれから50年

東大安田講堂で 医療と介護の未来を語る

1月12日、東京大学安田講堂でNPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワークと地域医療研究会の合同シンポジウム「2019団塊・君たち・未来」が開かれた。50年前の「安田講堂攻防戦」を強く意識した集いでもあった。かつてここに立てこもった“元闘士”を含め、さまざまな領域、年齢、思想の“活動家”が集まり、医療と介護の未来について討議した。

地域医療、在宅医療＝社会運動

なぜ、在宅医療のシンポジウムが安田講堂50年にこだわるのか。そこには大きく2つの理由がありそうだ。1つは、地域医療、在宅医療の歴史と全共闘世代の深いつながりである。黒岩卓夫氏(医療法人萌気会)は、1960年6月15日、全学連による国会突入時に重傷を負った1つ前の世代だが、その間の経緯を次のように語った。「60年安保闘争、そして全共闘闘争の終わりから、1人2人と首都を去り、全国に散って、ささやかではあっても医療のそれぞれの拠点をつくった。ここから各地で地域医療が動きはじめた。1980年こうした拠点をつくった同志たちが集まって、『地域医療研究会』がつくられた。さらに病院からの地域医療づくりに限界を感じ、クリニックで孤軍奮闘をしていた者たちによって、『在宅ケアを支える診療所・市

民全国ネットワーク』がつくられた」。

そうした動きの中心にいたのが、他ならぬ黒岩氏だ。同氏は1970年に新潟県大和町(現・南魚沼市)の国保診療所に赴任。76年にはこれを病院とし、町立ゆきぐに大和総合病院を誕生させた。保険・医療・福祉を一体化した地域医療は「大和方式」として全国に知られるようになる。

忘れてならないのは、同氏も名前を挙げた故・今井澄氏である。今井氏は、実は安田講堂攻防戦の防衛隊長。逮捕、約1年間の勾留の末、復学して医師となり、諏訪中央病院(長野県)に赴任した。この病院にほんの数カ月早く来ていたのが、鎌田實氏(諏訪中央病院名誉院長)だ。鎌田氏によると、当時の医師会は「すごい活動家来る」と戦々恐々、なかなか赴任できなかったという。その後、2人で手分けして公民館での脳卒中予防講演会などを精力的に行い、健康づくり運動や在宅

ケアの充実を推進した。今井氏は同院の院長を務めたあと参議院議員に当選、介護保険制度の生みの親とも呼ばれる貢献を果たした。

すなわち、辺境の病院はアカデミズムを嫌い、あるいはアカデミアから忌避された医療者を受け入れた。こうした人々の実行力と組織力により、地域医療は進化し、地域に根差した在宅医療が展開されるようになった。

その経緯を、NPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク会長の苛原実氏は「地域医療、在宅医療は地域を変える社会運動だった」と要約。同ネットワークの「安心して子育てができ老いても障がいがあっても自分らしく暮らすことができる地域コミュニティの創造」という理念を示した。

団塊世代の取扱説明書を提示

安田講堂50年にこだわる、もう1つの理由は2025年問題だ。全共闘世代＝団塊世代が一斉に後期高齢者になり、医療や介護のニーズ、費用の急増を引き起こす深刻な問題で、医療や介護の提供側の対応が問われている。

シンポジウムの実行委員長を務めた堂垂伸治氏(千葉県松戸市・どうたれ内科診療所院長)は1948年生まれ、団塊世代で、東大工学部で闘争に参加。自動車会社の下請け工場で肉



体労働に従事した後、千葉大学医学部に再入学した経歴を持つ。

同氏は、自分たちが若いころ、第二次大戦を止められなかった親世代を批判したように、「私たちには若い世代に対する責任があり、追及される余地がある」と語った。年金、医療費、介護費などの社会保障費で、大きな負担を強いることを申し訳ないと感じている。しかし、それを世代間対立に短絡させてはならないという。国家を統治する者の常とう手段は「国民の分断」であるからだ。今回のテーマ「団塊・君たち・未来」は、「団塊世代」が「君たちの世代」と交流、連帯し、「未来」を創造したいとの思いを込めたもののなのである。

とはいえ、同氏は「皆様が大変なるだろう」と述べ、団塊世代の「取扱説明書」と「私たちの遺言」を提示。団塊の世代からの贈り物とした。

団塊世代の「取扱説明書」と「私たちの遺言」は

ウェブ版で紹介→

